

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【浦和大里小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	タブレット学習や漢字ドリル・計算ドリルを活用して基礎的・基本的な知識・技能の定着を継続して図っていく。下学年の学習内容にも折を見て触れることでより一層の定着を図る。児童の学習計画や学習状況を適時確認し、児童自身が主体的・計画的に学習できるように支援する。サキドリ研究として確保した月1時間の授業時間を有意義に活用する。年度初めに全国学力・学習状況調査やさいたま市学習状況調査の結果の分析を全教職員と共通理解する。各学年の児童の児童の課題を明確にするとともに、家庭学習のあり方も含め検討し、指導をしていく。年度初めに学年で年間指導計画の確認とカリキュラム・マネジメントについて考える時間を設定する。各単元で児童にどんな力を身に付けさせたいかを明確にし、教材研究を充実させることで「分かる授業・楽しい授業」を実践していく。
思考・判断・表現	協働的な学びの時間を確実に確保し、カリキュラム・マネジメントを踏まえ、児童の思考力・判断力・表現力の向上を継続して図っていく。学校課題研究を中心に、各教科において児童の思考力・判断力・表現力を高める授業実践、教材研究を引き続き行う。実践したICT機器の活用等の手立ても学校全体で共有しながら、自分の考えを表現することや人に分かりやすく伝えることを意識した学習活動を実践していく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着 <指導上の課題> 児童の学習状況の把握や学習計画の作成支援	⇒ 「ドリルパーク」等を活用し、基礎学力の向上を図る【毎日実施】。児童自らが学習について振り返ったり、学習計画を立てたりする時間を設定する【月に1度実施】。 児童の学習状況を把握し、個に応じた適切な支援を行う【毎日実施】。学習計画の立て方や学習への取り組み方を教え、見通しをもって学習することや自己の学習について振り返ることの大切さを伝える【月に1度確認】。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 進んで考え表現し、粘り強く課題に取り組む態度 <指導上の課題> 子ども主体の学びとなるような授業づくり	⇒ 学校課題研究のテーマを「試行錯誤しながら、粘り強く学習に取り組む児童の育成～自分で考え、自分で決める～」と設定し、教職員一人ひとりが授業改善に取り組む【通年】。 教職員同士が公開授業を参観し合い指導力を高める【1年3回実施】。課題や課題解決の方法を自ら決める時間を設定【毎単元実施】。試行錯誤することができる自力解決や協働学習の時間の確保【毎単元実施】。自らの学び方を調整するための振り返りの時間の確保【毎授業時間実施】。

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	A	「ドリルパーク」等を活用し、基礎学力の向上を図る【毎日実施】。(教職員自己評価3月100%) 児童自らが学習について振り返ったり、学習計画を立てたりする時間を設定する【月に1度実施】。(88.6%) 児童の学習状況を把握し、個に応じた適切な支援を行う【毎日実施】。(100%) 学習計画の立て方や学習への取り組み方を教え、見通しをもって学習することや自己の学習について振り返ることの大切さを伝える【月に1度確認】。(94.3%) 主に理科や社会において、他学年の単元をドリルパークを使って復習する機会を設ける。【月に1度以上実施】(66.7%) 学校生活の隙間時間を効率的に使い、読書やドリルパークの習慣化を図る。【毎日実施】(100%)
思考・判断・表現	A	学校課題研究では各教科サークルに教職員が所属し、授業改善に取り組んだ。全教職員が3回の公開授業を行い、指導力を高めた。 課題や課題解決の方法を自ら決める時間を設定【毎単元実施】。(91.4%) 試行錯誤することができる自力解決や協働学習の時間の確保【毎単元実施】。(100%) 自らの学び方を調整するための振り返りの時間の確保【毎授業時間実施】。(97.1%)

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	算数では、数直線上に示された数を分数で表す問題に課題がみられた。分数の意味を正しく理解し、数直線の1目盛りを正しく読み取ることや分数を単位分数のいくつ分として捉えることが不十分である。また、台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる問題でも課題がみられた。上底と下底が必ずしも上下にない、回転された図形も普段から取り扱う必要がある。理科では、身の回りの金属について、電気を通す性質や磁石につく性質を理解しているかをみる問題で課題がみられた。電気の回路の問題と併せて3年生の学習内容であるため正答率が低くなったと考えられる。全年度で課題を共有し、どの学年でも課題を意識して日々の授業を実践していくことが大切である。
思考・判断・表現	国語・算数では、自分の考えを言葉や数などを用いて記述する問題に課題がみられた。国語では自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること、算数では目的に応じて適切なデータを選択して判断しその理由を言葉や数を用いて記述することに苦意識があり無回答率も高かった。「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の肯定的な回答が91.5%であることから、友達や説明の仕方を児童が取り入れることができるように、引き続き協働的な学びの機会を確保していく。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	算数では3年生の数直線上の数の大きさについての理解を問う問題や、各学年の図形の意味や性質を問う問題で正答率の上昇が見られた。理科では5、6年生の電気の回路の問題の正答率の上昇も踏まえ、全国学力・学習状況調査の結果(分析・考察)から課題を教職員で共有し日々の授業に取り組んだ成果である。社会では5、6年生の地図記号を理解しているか問う問題で課題がみられた。3年生の学習内容であるため正答率が低くなったと考えられる。高学年でも学習内容と関連する下学年の内容について復習することで定着を図る必要がある。生活習慣等に関する調査(〇〇の授業の内容はよく分かりますか)の質問項目において、国語3年87.1%、4年95.7%、5年96%、6年91.7%など算数や社会、理科でも同様に高い数値となっている。児童の「よく分かる」と実際の知識・理解の定着には、乖離が生じていることを教職員が改めて認識し、学力向上策の継続した取組と修正を行っている。
思考・判断・表現	国語では3、4年生の相手に伝えるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるような話の構成を考えることができるかを問う問題で課題がみられた。高学年になると話すこと・聞くことの内容についての正答率が大きく上昇することから、低学年から中学年までの主な課題として捉え、来年度の指導に生かしている。 算数ではデータの活用領域でどの学年も課題がみられた。グラフ(棒、折れ線、円、複合)や二次元表の見方を理解し、特徴を読み取る活動や数値をグラフや表に表す活動を教科横断的に取り入れ、定着を図る必要がある。 生活習慣等に関する調査(授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していますか)の質問項目において5年74.1%、6年67.9%という結果を踏まえ、各教科において引き続き授業改善をしている。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	授業の終わりや家庭学習において、ドリルパークや漢字ドリル、計算ドリルを活用し基礎学力向上を図ることができた。ドリルパーク実施状況のデータやノートの記述内容から児童の学習状況を把握しながら、適宜声掛けや支援を行っている。	中間期見直しにより追加 主に理科や社会において、他学年の単元をドリルパークを使って復習する機会を設ける。【月に1度以上実施】 学校生活の隙間時間を効率的に使い、読書やドリルパークの習慣化を図る。【毎日実施】
思考・判断・表現	B	各教科において公開授業が行われている。教職員同士が授業を見合い、協議することで授業改善に取り組んでいる。自らの学び方を調整するために振り返りの時間を毎時間設定している。高学年ではルーブリック評価を取り入れる学級も増えてきていて、授業終わりに児童が自らの学びを振り返り、次の学習に生かしている。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)